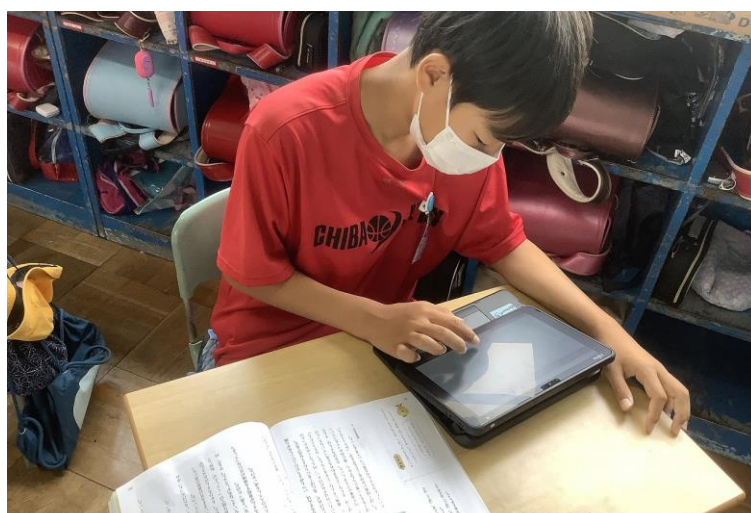


他者ととともに考え，課題を解決する児童の育成
～ICTの効果的な活用を通して～



四街道市立四和小学校
齋藤 美由紀
齋藤 紅也

1 研究主題

他者とともに考え、課題を解決する児童の育成
～ICTの効果的な活用を通して～

2 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

Society5.0で代表される社会は、IoTですべての人とモノがつながり、様々な知識や技術が共有される社会とされる。人工知能はより高度化され、必要な情報が瞬時に提供されるようになり、ロボットや自動運転システムの普及により、少子高齢化による労働人口の減少や地方の過疎化、貧富の格差等の問題が解決されると言われている。これら社会の変革を通じて、これまでの閉塞感を打破し、希望の持てる社会、世代を超えて互いに尊重し合あえる社会、一人一人が快適で活躍できる社会となっていくことが想定される。また、Society5.0の世界では、仮想空間と現実空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会が展開される。しかし、現実には、現在はその過渡期に当たり、情報通信技術の発達にともなう急速なグローバル化や少子高齢化等の社会の急激な変化に伴い、高度化、複雑化する諸課題への対応が必要となっており、先行きは不透明な状態である。

こうした中で、21世紀を生き抜くための力を育成するために、これからの学校は、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力や習慣の育成等を重視する必要がある。国際的視野を持ち、個人や社会の多様性を尊重しつつ、他者と協働して課題解決を行う力が求められる。

(2) 学校教育目標、経営方針から

本校の学校教育目標、経営方針は以下のようになっている。

－全児童が生き生きと活動する学校の創造をめざして－

学校教育目標

夢や希望を持ち、心豊かでたくましい児童の育成

- 1 思いやりのある子ども
- 2 しっかりと勉強する子ども
- 3 体をきたえ、がんばりのきく子ども

《めざす学校像》

- 1 笑顔があふれる学校
- 2 子どもが生き生きと学ぶ学校
- 3 子どもと教師が何事にも全力で取り組み、努力し合っている学校
- 4 家庭や地域社会と密接に結びついている学校

《めざす児童像》

- 1 自他を大切にし、優しい子ども
- 2 しっかりと学ぶ子ども
- 3 元気に運動する子ども
- 4 進んで働く子ども

《めざす教師像》

- 1 専門職としての力量見識を持ち信頼される教師
- 2 子どものことを第一に考えることができる教師
- 3 保護者の思いや願いを感じ取ることができる教師
- 4 社会人として通用する識見を持った教師

(1) 生命尊重・人権尊重の精神を養い、いじめのない学校をつくる。

- ・友だちも自分も大切にし、心の痛みがわかる心情を育てる。
- ・自然環境や生き物を大切にすることを養い、さらには環境保護にそれぞれが深く関わっていることに体験を通して認識させる。
- ・いじめの未然防止と早期発見に努め、いじめの傍観者をつくらない。

(2) 互いの個性を認め合い、切磋琢磨して喜びを感じる学校生活にする。

- ・一人一人の個性を大切に、生徒指導の機能を生かしたきめ細かな指導をする。
- ・努力し合って互いに伸びる集団づくりに努める。
- ・学校行事などに児童を積極的に参画させ、主体的な活動を促し、達成感を味わわせる。

(3) 真・善・美に感動する心を育て、実践できる態度を培う。

- ・児童一人一人のよさの伸張を図る生徒指導・学習（道徳）指導を推進し、よりよい生活習慣の習得を図るとともに、よいことを進んで実践する態度を育てる。

(4) 集団生活を通して共に磨き合う心を大切にする。

- ・（可能な範囲で）縦割り活動を有効に活用し、協力・協調の中に生きる喜びや自己存在感・自己有用感を高め、自己実現が図れる体験活動を重視する。

(5) 国際理解教育を推進し、国際社会に生きる日本人としての資質を養う。

- ・日本の国や地域社会の文化と伝統に対する理解と関心を高める。
- ・諸外国の人々の生活や文化・歴史を理解し、敬意をもって他者を尊重する態度を育てる。
- ・インターネットの利用を通して、広く社会を知り、国際社会の一員として諸外国の人々に対して差別や偏見なく接することのできる態度を育てる。

本校の経営方針の（１）～（５）は、道徳的価値に大きく関連するものが多くなっている。特に、**(5)**については、「今日的な課題」にも挙げられたようにグローバル化の視点に立ち、ICTの活用にもつながる部分である。

(3) 本校の研究主題との関連

＜本年度の研究主題＞

『自ら学び、課題を解決する児童の育成』～ICTの効果的な活用を通して(STEP2)～

- ・昨年度は令和2年度以前の研究主題『自分の思いや考えをもち、互いに伝え合う児童の育成』を引き継ぎ、その手段の一つとしてのICTの活用を効果的に行い、研究を推進した。今年度は、活用上の課題や問題点を浮き彫りにして、その解決を図りたい。
- ・ICTの活用により学習指導要領にある資質・能力（情報活用能力・課題解決力等）の育成を推進する。
- ・タブレット導入の次の年度に当たり、一人一台環境の意味・意義を共有し、さらに伸長する。
- ・四街道中学区小中一貫教育の充実に向け、四街道中・和良比小と連携した研修を推進する。

一昨年度には、一人1台タブレットが配付された。昨年度は本校においても「GIGA元年」と銘打ち、まずは教師も児童と一緒に使ってみる、という形で研修を始めた。本年度は2年目であり、昨年度の成果を生かしながら、問題点や課題を浮き彫りにして、その解決を図っている。

(4) 児童の実態

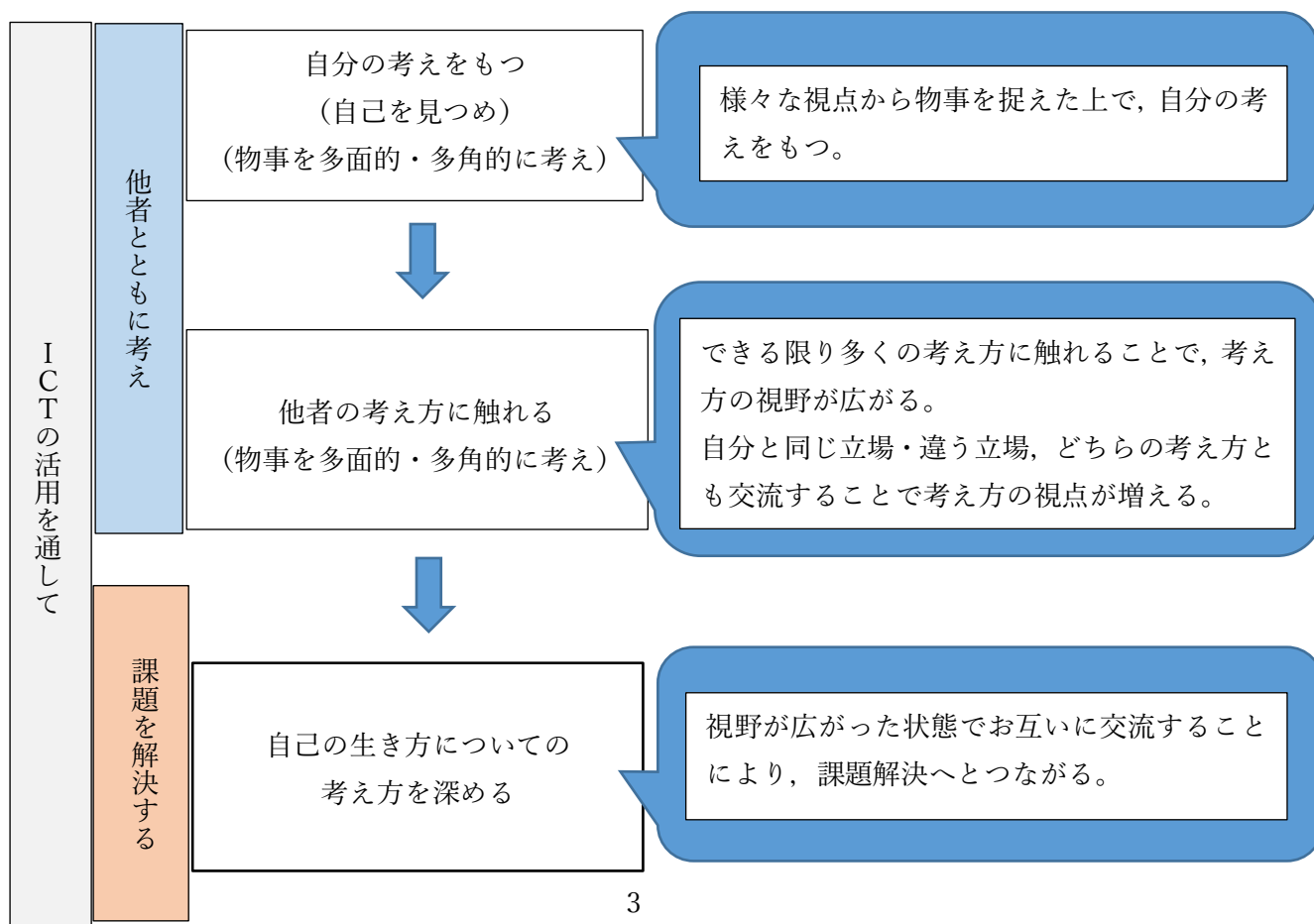
本校は、四街道市南西部に位置しており、最寄りのJR四街道駅から徒歩10分圏内にあり、都内へも通勤可能なベッドタウンの一角にある。本年度の児童数は、男子275名女子259名、合計534名で、すべての学年が3学級ずつ、特別支援学級が知的・情緒の2学級で、合わせて20学級である。明治時代、子どもたちのためにと自らの土地や資材を提供して学校を造ってくださった地域の方々の熱意は、未だに脈々と受け継がれており、学校周辺の住民の方々は、本校の教育活動に非常に協力的である。一方、近年めいわ地区に新たな住宅が増え、めいわ地区の児童数が7割近くを占めるようになり、自己主張の強い保護者も増えつつあるが、子どもたちは子どもらしく素直な子が多い。一方で、人間関係をうまく築けない児童も多く、学級経営上の課題となっている。学級活動においてはグループエンカウンターを取り入れたり、朝帰りの会では一人一人に発表の時間を設け、コミュニケーション能力の伸長を図ったりしている。道徳科においても、「親切、おもいやり」「感謝」「友情、信頼」「相互理解、寛容」等の内容項目について、学年毎に研修を行い、重点的に進めている。また、『『いじめ』は絶対にゆるさない』を合い言葉に人権意識の醸成等も行い、「笑顔あふれる四和小」を目指している。

昨年度に導入された一人1台タブレットであるが、児童の慣れもまた、教職員の覚えも早く、普通の授業でも頻繁に使用している。道徳の授業においても、ポイントを打って自分の気持ちを表したり、意見を提出したりする等、タブレットの使用も随時試みている。

以上を踏まえて、本校においては「他者とともに考える中でICTを効果的に活用し、課題を解決できる児童」を育成したいと考え、本研究主題を設定した。

3 研究仮説

(1) 研究仮説の設定に至る経緯



(2) 研究仮説

<仮説1>

複数の視点から考える工夫をすることで多面的・多角的に物事を考え、自分の考えをもてるであろう。

【具体的な手立て】

- ① 教材の内容理解において要旨をおさえたパワーポイントの提示を行う。
 - 話の順を追いながら人間関係を図解して確認できる。
 - 教師が問いかけながらスライドを進めることで、登場人物各々の心情を考えながら内容を理解できる。

- ② 中心発問の場面では、複数の視点から物事を捉えさせ、学級全体で議論する。
 - 「ひきょうだよ。」という言葉が言われた側・言った側それぞれの立場から考えさせる。
 - 教師が話し合いのファシリテーターとなり、一人の考えに対する切り返しの発問をしていく。
 - 発表をしない児童に対する意見の表出の機会として、挙手を通して議論に参加させる。

<仮説2>

ICTを活用することで自分の考えを発信しやすくなるとともに、より多くの他者の考え方に触れ、考え方の視野を広げることができるであろう。

【具体的な手立て】

- ③ ICT（ムーブノート）の活用（自分の考えを発信しやすくなるために）
 - 場面カードを選択して考えさせることで、より自分ごととして課題を捉えられる。
 - タブレットを介した記述式の発表にすることで、積極的な発言の機会の確保ができる。

- ④ ICT（ムーブノート）の活用（他者の考えとの比較を通して自分の考えを深めるために）
 - 一人一人が一斉にクラス全員の考えを閲覧できる。
 - 人によって選んだ場面が違うことで、視点の違う考え方に触れることができる。
 - 場面カードを閲覧することで、自分と同じ場面を選択していても、人によって違う行動・言動を選択していることがわかり、視野が広がる。

<仮説3>

様々な考え方に触れた後にさらに交流することで、課題を解決する児童の育成ができるであろう。

【具体的な手立て】

- ⑤ ICT（ムーブノート）のコメント機能を活用する。
 - 多様な考え方に触れて、視野が広がった段階で課題に向き合う。

考えが違う友達との交流・・・異なる発想の発見

考えが似ている友達との交流・・・共感的理解



協働的な課題解決

4 研究の実践 資料編参照

5 成果と課題

<仮説1>

複数の視点から考える工夫をすることで多面的・多角的に物事を考え、自分の考えをもてるであろう。

○成果

- ・パワーポイントでの内容把握が効果的だった。
 - 視覚情報の補助があることで、全員が教材の内容を同じように理解しているところからスタートできた。
 - 5分程度で内容の理解ができたおかげで、補助発問や中心発問について話し合う時間が十分にとれた。

(児童のアンケートから)

A 児

みんなの意見がわかったから。(4-7ノートで)
先生のパワーポイントがわかりやすかった。

B 児

パワーポイントで話の内容が一発でわかった。

- ・「ひきょうだよ。」という言葉が言われた側・言った側のそれぞれの立場で考え、教師が話し合いのファシリテーターとなり切り返しの発問をすることによって、さらに掘り下げて考えることにつながり、思考の深まりが見られた。

(例) T: ぼくは、謝りに来たのに「ひきょうだよ。」と言われてどう思っただろう。

C1: 思ってもみないことだった。

T: ぼくは、なんて言われると思ってたんだろう？

C2: ありがとう。と言われたらと思ったと思う。

T: 何に対してのありがとう？

C2: 心配してくれたこと。

C3: 感謝されると思った。

C4: 最後の日だし、ぼくに気をつかってやさしい言葉をかけてくれると思ったんじゃない。

- (例) T：たかひろ君は、どうして仲のよかったぼくに「ひきょうだよ。」なんて言ったのだろう？
- C1：ゆみさんは助けてくれたのに、ぼくは助けてくれなかったことがショックだった。
- T：どうして他のみんなも助けなかったのに、ぼくが助けないことがショックなの？
- C2：もう友達やめられているのかと悲しくなったから。
- C3：友達だと思っていたのはぼくだけだったんだ。裏切られたと怒った。
- T：ぼくが助けないことと、他の友達が助けないことは違うの？
- C4：違う。仲がよかったからこそ、あの友情は嘘だったの？と余計にショックだったと思う。

▲課題

- ・切り返しの発問に対して反応するのは一部の児童であり、大半の児童たちは発表を苦手とし聞き手に回っていた。
- 出てきた意見に対し、挙手させることで考えの表出とさせていたが、果たしてそれでよいのか疑問が残る。

<仮説2>

ICTを活用することで自分の考えを発信しやすくなるとともに、より多くの他者の考え方に触れ、考え方の視野を広げることができるであろう。

○成果

- ・3枚の場面カードの中から選択して考えを書いたことが効果的だった。
- 場面カードを選ぶ時点で、自己決定の場となり、自分事として考える手立てとなった。
- 場面カードの選択・その場面における行動・言動の選択と、連続的な思考につながった。
- カードを場面ごとに色分けしていたことで、共有した際に一人一人の立場が一目でわかった。

The screenshot displays a digital workspace titled '広場' (Open Space) with a '私のノート' (My Note) section for '2022年7月14日-3時間目' (July 14, 2022 - 3rd Period). The interface features a grid of cards for different scenes (場面) and roles (役割). The cards are color-coded and contain text for dialogue and actions. The interface includes a header with '広場' (Open Space), '私のノート' (My Note), and '2022年7月14日-3時間目' (July 14, 2022 - 3rd Period). There are also buttons for '作るモード中' (Creating Mode) and '終わる' (End), and a 'みんなの広場' (Everyone's Open Space) section with a '参加中' (Participating) button.

話がわかりやすく、先生の説明もわかりやすかったから。
考える場面が多くて楽しかったから。(4-7ノートも)

あま意見を聞けない人の考えを見れたからよかったです。
またやりたいと思いました。
場面が三つあって、自分が好きな場面をえらべるというのもいいと思いました。

- ・ムーブノートの広場を通して、学級全体の意見を把握できたことは効果的だった。
- これまで同じグループや、発表した児童の意見しか把握できなかったが、一人一人が自分の画面で学級全体の意見を把握できた。
- 発表が苦手な児童も、文字表現によって、学級の全員に自分の考えを示すことができた。

▲課題

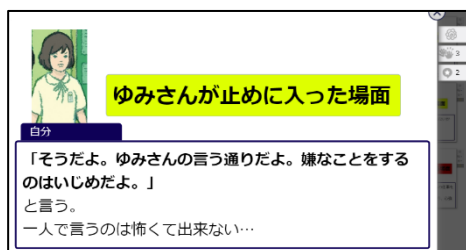
- ・学級全員のカードを同じ広場で共有させたため、枚数が多かった。
- グループごとに広場を区切ったり、同じカードごとに広場を分けて提出させたりする工夫が必要だった。

<仮説3>

様々な考え方に触れた後にさらに交流することで、課題を解決する児童の育成ができるであろう。

○成果

- ・コメント機能によって互いの考えを深め、課題解決に向かうことができた。
- ・拍手・スタンプ機能によって、自分にあった意思表示ができた。
- コメントを打ちこむ余裕がなくても、自分が共感できた意見には拍手ボタンを押すことで、相手に思いを届けられた。
- 学習の最後にスタンプを押させることで、この1時間で児童にどのような心情の変化があったのかを見取ることができる。



カードを選択すると、手のマーク（拍手）と☆のマーク（コメント）が表示される。それぞれボタンを押すと、拍手・コメントができる。



コメントボタンを押すと、このような画面に移行する。それまでのコメントが一覧で出てくる他に、上部には「〇人がはくしゅしています」と表示されており、そこをクリックすると、拍手してくれた友達の氏名が一覧で表示される。



児童用のムーブノートにのみ表示されるスタンプ。「かんがえがかわった!」「はっけんがあった!」「なっとくした!」「あたらしいぎもんをもった!」というスタンプがあり、授業終わりに振り返りとして押させることで、見取りができる。教師が集計機能を使うことで誰がどのような感想をもったのか把握でき、指名計画としても活用できる。

▲課題

- ・児童の活動時間のさらなる確保が必要。
 - 文字を打つ速度が遅い児童にとっては、自分の考えを打ちこんで送信するだけで、伝え合いの時間の大半を過ごしてしまった。
 - 話し合いを好む児童にとっては、もっと多くの児童へコメント機能を使って意見を伝えたかったが、そこまで至れなかった。



プリントに記入したものを撮影して共有したり、ムーブノートを使用する前の活動をさらに絞る必要がある。

いろんな人の意見が見れてよかったけれど、コメントを書いたりする時間も、もったいない。

- ・課題解決をオープンエンドとしてしまった。
→「いじめが起きたとき、自分に何ができるだろうか。」という学習問題のもと授業を展開していたので、それに対する自分なりの回答を提出させるべきだった。



指導と評価の一体化

<全体を通して>

- ・生の声と ICT を取り入れるバランスが難しい。
→ICT におけるメリットもたくさんあるが、道徳において生の声のやりとりは必要不可欠であるが、道徳においても ICT を取り入れつつ考えを深める学習スタイルを取り入れなければならない。

ICT 黎明期の現在は・・・

教師が教材研究に力を入れられるような環境が整い、
生の声と ICT のハイブリット型な授業を構築していくべき。

資料編



【目次】

- | | |
|---------------|--------|
| 1. 学習指導案 | 1 ページ |
| 2. 他の教育活動との関連 | 9 ページ |
| 3. 児童の変容 | 10 ページ |

4 研究の実践

第6学年

指導者 齋藤 美由紀

1 主題名 いじめをなくすには

内容項目名：C 公正，公平，社会正義（内容項目番号 C-（13））
（教材名「ひきょうだよ」 出典「小学道徳6 はばたこう明日へ」）

2 主題設定の理由

（1）価値について

「ひきょうだよ」内容項目名：C 公正，公平，社会正義（C主として集団や社会との関わりに関すること-（13）誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく，公正，公平な態度で接し，正義の実現に努めること。）では，差別や偏見により，いじめが広がっていく人間の心の弱さに迫りたい。差別とは，人と人との間に正当な理由もなく上下の差異をつけて分かつことである。また，偏見とは，特定の人間に対して偏った見方をすることである。どちらも，一人一人かけがえのない尊い個別的な存在であることを無視することによって生まれる。いじめは，その差別や偏見が具体的な行為となって表れたものである。差別や偏見がなく，正しいこと（公正）が，誰に対しても，いつでもどこでもえこひいきなく（公平に）行われるところに正義が生まれる。本時の学習は，中学校での「C-(11)正義と公平さを重んじ，誰に対しても公平に接し，差別や偏見のない社会の実現に努めること」につながっていく。中学校では，小学校時代には経験しなかった先輩・後輩という上下関係に直面していく。そして，これまで以上に教師や保護者といった大人の目が届かない世界を獲得していく。その上でどんな場面においても，他者を差別したり偏見をもったりせず，よりよい人間関係をつくっていくとする実践意欲や態度を育てることが重要だと考える。

（2）本学級の児童の実態について

本学級の児童は，男子17名（内 支援級児童2名），女子13名，合計30名である。道徳学習において，発表に対する意欲をもっている児童は学級の1～2割程度である。しかし，プリントへの記入や，ICT 機器を通じた意見の送信には全員が参加している。思いはあるが，それを表出することを苦手としたり，恥ずかしいと感じたりする児童が多い。そのため，学級内に付箋セットを常備し，道徳の学習に限らず，付箋に自分の考えを書き出し，それをグループの友達とホワイトボード上で共有するブレイクストーミングとKJ法を活用した学習方法を進めてきた。しかし，このような方法ではグループ内の友達同士では深く考えを共有できても，学級全体の考えを共有することに難しさを感じている。

(3) 教材について

「ひきょうだよ」

たかひろさんは、いじめを受けている。主人公のぼくは、低学年のころたかひろさんと仲がよかったが、いじめを受けているたかひろさんになんの助け舟も出せず、傍観者になっていた。そんなある日、日々、学級で繰り返されるいじめにしぶれを切らしたゆみさんが、いじめをやめるように注意するが、誰もゆみさんを援護することなく何も解決しなかった。その後、たかひろさんは転校することになる。ぼくは、たかひろさんを助けるために何もできなかったことを反省し、たかひろさんに謝りに行く。たかひろさんは「何もしてくれなかったのに、最後にそんなことを言うなんて、ひきょうだよ。」と言って、ぼくをにらみつける。ぼくは茫然として、「ひきょうだよ。」という言葉について考える。本教材は、学級内におけるいじめの問題を直視している。いじめをする側とされる側だけでなく、クラスの中の傍観者や実際に手を差し伸べる者も登場する。しかし実際には、いじめを傍観してしまう児童が多いであろう。実態に即した教材であるため、児童が実際にどのように感じ判断し行動していくべきかを、学級内で話し合い考えていくことができる。

(4) 指導観・ICT 活用について

本時では、パワーポイントを使い、スライド形式で話の要旨をおさえていく。このような手立てをとる理由は、文字情報から答えを出そうとする児童が多い実態から、国語の読み取りと一線を画したい点と、児童に十分に考える時間を確保したいという点からである。

中心発問の場面では、「ひきょうだよ」という言葉を発した側、受け取った側、双方の思いについて考えさせる。両者の思いを考えることによって立場を変えた見方ができ、より多面的・多角的に状況を捉えるとともに、心情に迫っていけると考える。

振り返り（自分にプラスワン）では、ミライシード内のムーブノートを使用する。いじめが起きる状況では、頭ではいけないことだとわかっているにもかかわらず善の行動をとることが難しいと感じる人間の心の弱さや葛藤がある。そのため、人によっては行動を起こすことをためらう場面もあることに気付かせたい。その手立てとして、教材の場面絵を挿入した複数のカードから場面を選択して、自分だったらどのような声をかけるか吹き出しのセリフを考えていく。また、6 学年の発達段階においてロールプレイを恥ずかしがる傾向にあるため、児童の日常となっている SNS に近い文字表現にすることで自己の考えを表出しやすくなる点もあると考える。

3 本時の指導

(1) ねらい

- 「ひきょうだよ。」という言葉から、ぼくとたかひろくん、両者の思いについて考え、いじめを傍観することの心の弱さに気づき、誰に対しても公正・公平に接しようとする心情を育てる。

(2) 展開

過程	時配	学習活動と主たる発問・ 予想される児童生徒の反応	支援及び指導上の留意点 ○評価（学習状況の見取りの視 点）	資料
導入	3	1. アンケート結果を提示し、価値の方向付けをする。 Q. よくないことだとわかっているのに、 どうしていじめは起こるのだろうか。 <予想される児童の反応> ・ふざけがエスカレートするから。 ・相手の気持ちを想像していないから。	・アンケート結果をもとに価値の方向づけをし、教材の内容につなげていく。	パワーポイント
	5	2. パワーポイントを使って、話の要旨をおさえる。	・事前読みをさせておき、場面ごとの要旨で話の内容を理解できるようにしておく。 ・教師が問いかけながらスライドを進めることで、登場人物各々の心情を考えながら内容を理解させる。	

学 いじめが起きたとき、自分に何ができるだろうか。


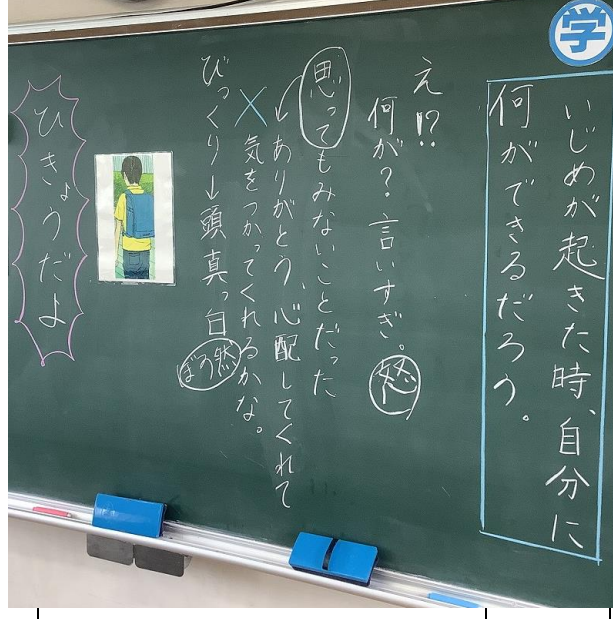
言いたいのはそれだけかい。何もしてくれなかったのに、最後にそんなことを言うなんて。

ひきょうだよ。

たかひろ、今まで何もできなくてごめん。

助けてあげたかったけど、勇気が出なかったんだ。ゆうすけたちに何かされるかもと思ったらこわくて。本当にごめん。

アニメーション機能を使い、話の流れに沿って、要旨を確認していく。キャラクターやセリフを映しながら、「この時、どんな気持ちだったろうね。」と問いかけ、各々の登場人物の心情に寄り添わせながら、内容確認をする。

<p>展開</p>	<p>1 5</p>	<p>3. 「ひきょうだよ。」という言葉から、ぼくとたかひろくん、両者の思いを話し合う。</p> <p>◎「ひきょうだよ」という言葉から、ぼくとたかひろ君の気持ちを考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぼくは、「ひきょうだよ」と言われて、どう思ったのだろうか。 <p><予想される児童の反応></p> <ul style="list-style-type: none"> ・そんな言い方をしなくても。 ・悪かったと思っているのに。 ・あの時は、勇気が出せなかったんだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・直接的に危害を加えていないぼくが「謝る」という行為から、ゆうすけたちと、ぼくの立場は同じなのか確認する。 ・教師が話し合いのファシリテーターとなり、一人の考えに対する切り返しの発問（【】書き）を学級全体に返していくことで、議論を深めていく。 	
		<p>勇気を出して謝ったら、たかひろ君が許してくれると思っていたのに、想像していたこととは違う言葉が返ってきて、びっくりしたと思う。</p>	<p>なんて言ったらいいか、わからなくなってそうだね。</p>	
<p>ぼくの気持ちを話し合っている様子</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・せっかく謝りに来たのに、言い過ぎだという怒り。 ・思ってもみないことだった。【なんて言われると思っていたの?】 →「ありがとう。」という言葉が聞けると思っていたと思う。心配していることに感謝されると思った。気をつかってくれると思った。 ・予想外のことにびっくりしてる。【びっくりしてどう思っただろう?】 →頭が真っ白で言葉が出なかったと思う。という考えが出た。 		<p>ぼく側の視点に立った意見の板書</p>

・たかひろくんは、何を思って「ひきょうだよ」と言ったのだろうか。
 <予想される児童の反応>
 ・今まで助けてくれなかったのに。
 ・ずっと苦しかったのに。
 ・自分がすっきりしたかっただけでしょ。

・たかひろ君の転校を機に謝りたいというのはぼくの勝手な思いであることを確認する。そして、自身の保身のために立ち回るぼくに対して失望したたかひろくんの気持ちに気付かせ

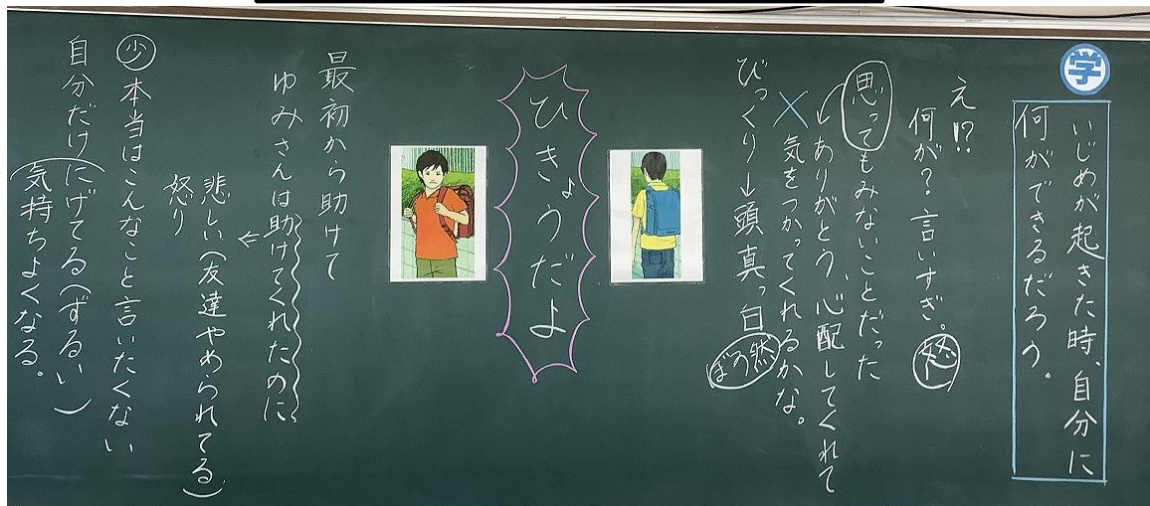
ムーブノート

「助けてくれないんだ。」
 って思うよね。

「友達じゃなかったんだ。」って
 ショックだろうね。

助けようとしてくれたのが、
 仲がよかったぼくじゃなくて
 「ゆみさん」だったことが
 悲しかったんじゃないかな。

たかひろ君の気持ちを話し合っている様子



「ひきょうだよ。」という言葉が言われた側と言った側、双方の気持ちをまとめた板書

- ・謝るなら、最初から助けてほしかった。
- ・ゆみさんは助けてくれたのに、仲良しだったはずの「ぼく」に助けてもらえなくてショックだった。【どうしてぼくが助けてくれなかったことがショックなの?】
 →友達やめられているのかと思って、悲しい。友達だと思っていたのに裏切られたというショック。
- ・自分だけひきょうだ。【何が自分だけなんだろう?】
 →自分だけいじめの現場から逃げてる。自分だけこれまでのことを謝って、すっきり別れようとしていることがずるい。

20 4. 本時の学習を通して、いじめが起きた時、自分に何ができるかムーブノートの場面カードを選択して記入し、互いに見合う。



ムーブノートのカード選択画面

場面ごとにカードを用意し、自分だったらどの場面でたかひろ君のために行動するか考えさせ、カードに記入させる。



各自の考えを広場で共有

場面カードに場面ごとに色分けした小見出しを入れていたことで、広場に投稿されてきた各々の選んだ場面の違いが一目でわかる。

今回は、学級全体の考えを一度で共有するという目的で使用したため、一つの広場に学級全員のカードを投稿させた。広場のタブを増やしてあげることで、「この場面を選んだ人は1番の広場を使います。」と同じ考え同士で議論させたり、「1班のみなさんは1番の広場を使います。」と少人数での焦点化した話し合いも可能となる。

・人によっては、行動に移すことが難しい場面もあることをおさえる。

・自分の考えを記入した児童から広場へ投稿させて閲覧する。選んだ場面カードが違う人や、同じ場面カードでも、記入している内容が違う友達の考えを見て、様々な視点からいじめを捉えさせる。

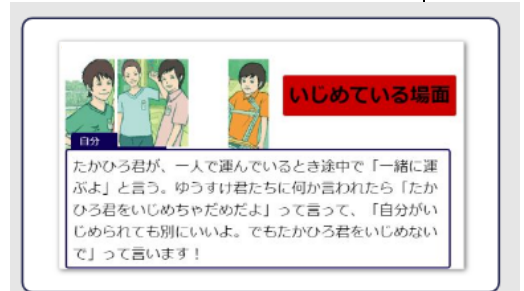
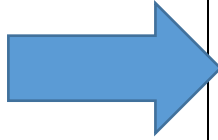
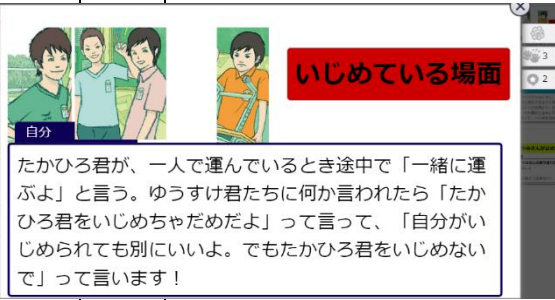
・友達の考えから新たな発見をしたり、疑問に思ったり、共感したりしたことを、コメントで送信し合う。

○心の弱さに負けていじめを傍観

することなく、誰にでも公正・公平な態度で接しようと考えることができたか。



コメント機能を活用した話し合いの様子

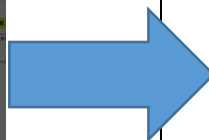


はくしゅ 3人が拍手しています。

2件のコメントがあります

さん
自分はいいけど、と言うのは私には無理かもしれないけど、同じような行動を私ちとると思います。

さん
ちゃんの勇気に感動です！



はくしゅ 12人が拍手しています。

2件のコメントがあります

さん
手伝ってあげるのも1つのアイデアだと思います。でも、ゆみさんと一緒なら、私は注意出来ると思います。

さん
私は、ゆみさんのところで止めに入ると他人に便乗するみたいに使われてしまいそうだと思うけれど、注意するのが一番かもしれないですね。

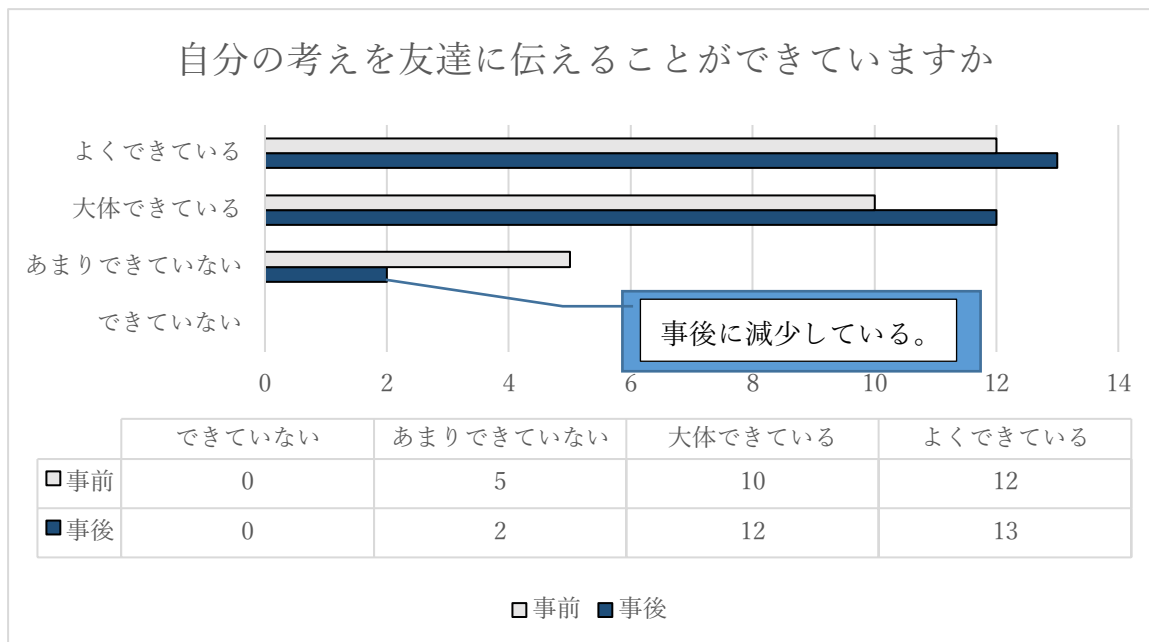
「自分はいいけど」という部分については、自分には無理かもしれないということに、友達の考えから気付いている。
また、勇気ある行動を称える声もあった。

たかひろ君がやらされている机運びを手伝ってあげるとするのはアイデアの一つだが、ゆみさんと一緒なら注意できると思うという考えを受け、他人に便乗しているように思われそうでゆみさんの場面は選ばなかったが、注意するのがいじめを止める上で一番よいと考えなおしている。

<p>終末</p>	<p>2</p>	<p>5. いじめを経験した人の手紙を朗読する。</p> <div data-bbox="244 712 938 1014" style="border: 2px solid blue; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px auto; width: 80%;"> <p>一人でいじめに立ち向かうことは心細いという考えに共感している流れの中で、いじめている方から考えてみても、複数人で立ち向かったほうが、いじめを止めることにつながると気付いている。</p> </div>	<p>はくしゅ 6人が拍手しています。</p> <p>5件のコメントがあります</p> <p>さん 私もそう思います。一人だと心細いですよね。</p> <p>さん 一人でいじつめっこに何かを言うのは心細いすからね。</p> <p>さん 一人で言うよりもみんなで言ったほうが、ゆうすけさんを止めることができますと思うのでいいと思います。</p> <p>さん ありがとうございます。</p>
			<p>・実際の人がいじめに打ち勝った体験をした力強いメッセージを朗読することで、余韻をもって授業を終える。</p>

5 児童の変容

☆事前事後のアンケート結果からの分析



事前調査の時点で、考えを友達に伝えることに対して肯定的な立場をとっていた児童が8割以上と多い状況だったが、今回のICTを使った自分の考えの表出では9割を超え、他者に気持ちを伝えやすいと感じている児童が大半を占めていたことがわかる。

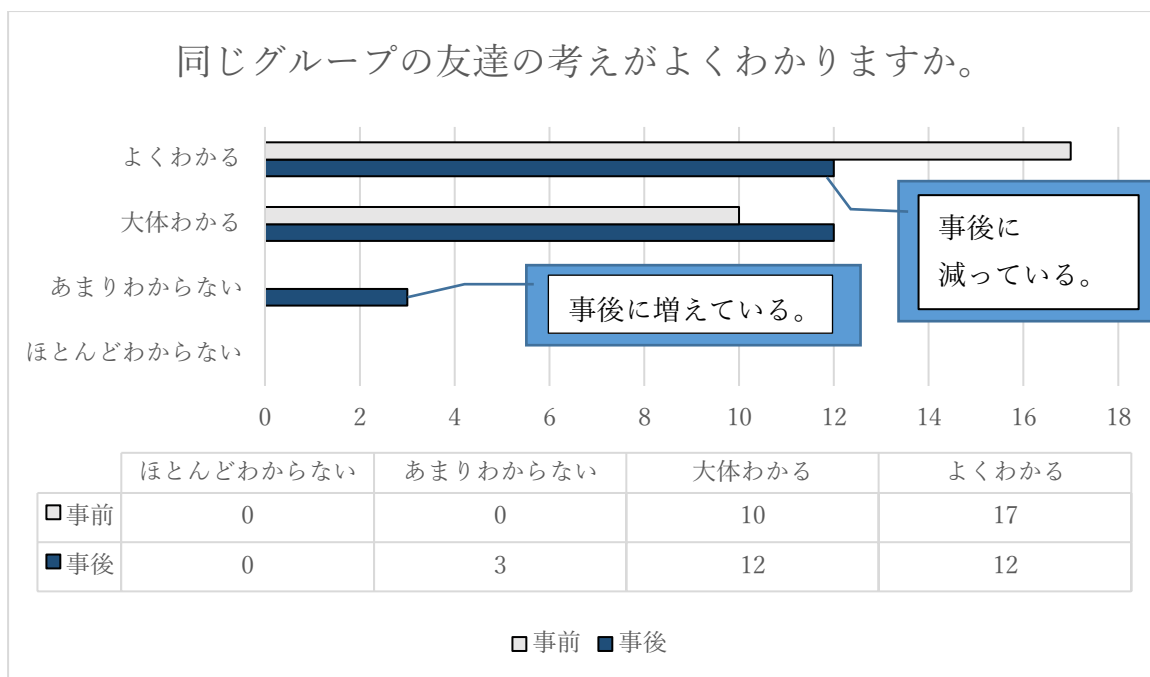
また、この項目で注目すべきは、「あまりできていない」という児童が事後の調査で大きく減少したことであろう。直接的な意見交換の場では控えめになってしまう児童も、文字表現であれば自分の考えを伝えやすくなったことがわかる。

<事後のアンケートから>

自分で声に出して伝えられること、かけるからいいとおもう。

発表をあまりしていない人でも発表しやすい。

話すよりもタブレットの方が言いがたかった。(楽しかった)

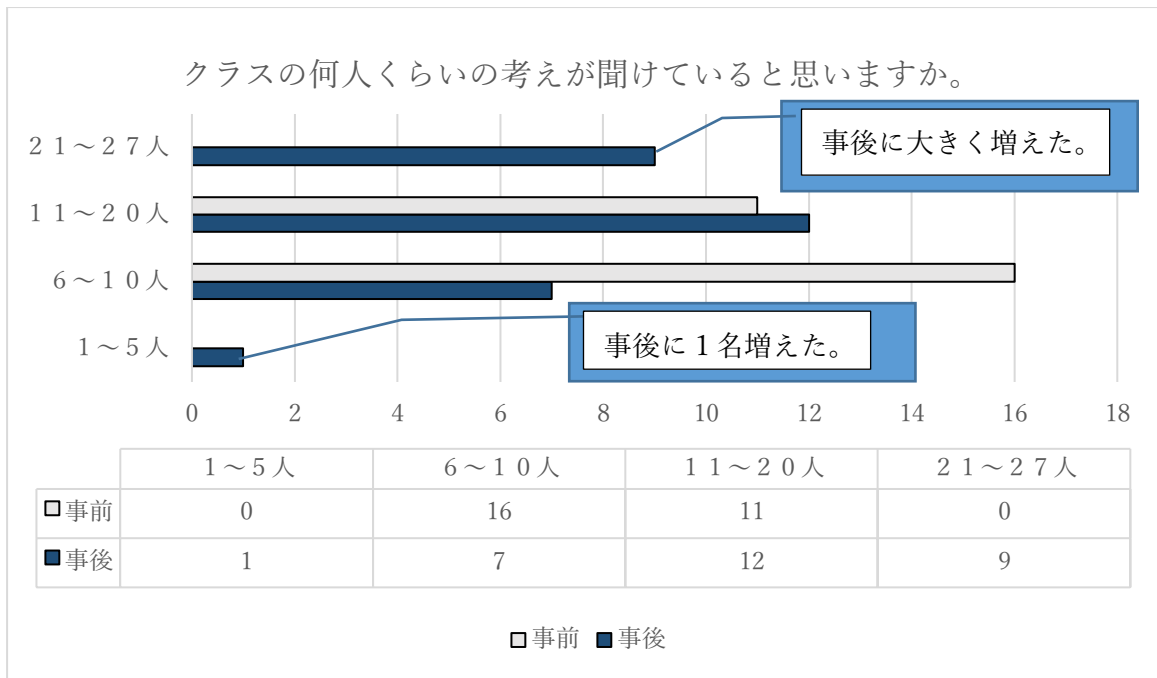


ICT活用以前の学習方法として、「グループ（4～5人）を主体とした思考ツールを活用した話し合いの後、全体共有」というスタイルを用いてきたこともあり、事前のアンケートでは、全員の児童が肯定的な立場をとっていた。しかし、今回のムーブノートを活用した学習では、グループの友達の意見が「よくわかる」という児童が5人減少し、「あまりわからない」という児童が0人から3人に増加したことから、グループという小集団の友達の考えについて理解を深めることは難しかったことがわかる。その原因として、机の向きこそグループの形にしてグループ内の友達と自由に会話しながら活動してよいとしていたものの、タブレットを触っている時間はどうしても個人の活動となり、これまでの授業で多く飛び交っていたグループ内の会話が減少してしまったからであろう。これまでのグループ学習の形態のよさもいかしていくことが大切だと感じられる結果となった。

<事後のアンケートから>

タブレットを活用することはいいことだ”と思うけれど”ふっうに話したほうがはやいと思う。

喋せつ話した方がいいと思った。



今回のムーブノートの活用のよさが大きく反映されたのはこのデータだった。これまでの学習では、「自己の考えの表出→グループでの意見交換→全体共有」という流れを用いており、全体共有の場で積極的に発言しない児童の意見は、同じグループの友達にしか共有されることはなかった。しかし、今回のムーブノートの活用により、学級全体の友達の考えを自分だけの画面で見やすく閲覧することができるようになった。学級の7.5～10割の友達の考えがわかるというのは、これまでの学習の方法では到底できなかったことである。その意味で、今回の学習は一定の成果を挙げられたのではないかと考える。

反面、事前アンケートにはいなかった1～5人という立場が増えているが、その児童に話を聞いたところ、「自分の考えを打ちこむのが遅くて、みんなの考えを見始めたところで時間になってしまいました。」とのことだった。6年生といえど、ICT 機器に対する慣れ具合が人それぞれなので、プリントに書いたものを写真に撮って投稿させるといった配慮が必要だったと考える。

<事後のアンケートから>

クラス全員の意見を知るこゝ外です、発表の苦手な人でも発表しやすくしていいなと思いました！これからは、タブレットを使った学習をしていきたいです。

文字を打つのがおそいので、友達の意見を見ることかできなかつた。グループの人は大体わかつた。

A児

○道徳の学習は好きですか。

とても好き あまり好きではない 好きではない

○なぜ、そう思いますか。

自分の気持ちについて、友達と話し合うことができるから。



○道徳の学習は好きですか。

とても好き あまり好きではない 好きではない

○なぜ、そう思いますか。

自分の意見の全てを言うことはできなかったが、楽しかった。

事前アンケートで、友達との話し合いができることから、道徳の学習を「好き」と答えていた児童である。事後のアンケートから、話し合いが好きな児童からすると、学級全員の考えを閲覧しつつ、それぞれの意見にコメントをしていくための時間はさらに必要だということがわかる。

B児

○道徳の学習は好きですか。

とても好き あまり好きではない 好きではない

○なぜ、そう思いますか。

色々なお話があって楽しいその話の感想も書いてそれを友達に伝えるのも楽しいから。



○道徳の学習は好きですか。

とても好き 好き あまり好きではない 好きではない

○なぜ、そう思いますか。

楽しかったしみんなの意見も聞いて楽しかったからです！
ムーブノートで意見交かんするのが楽しかったからです。

もともと道徳の学習が「好き」だった児童である。事前アンケートでは、自分の意見を伝えることに楽しさを感じていたが、事後アンケートでは、他者の意見を知ることやムーブノート上での意見交換に楽しさを感じられている。道徳の学習に対しても「好き」から「とても好き」へと変容した。

C児

○道徳の学習は好きですか。

とても好き 好き あまり好きではない 好きではない

○なぜ、そう思いますか。

自分の思っている事を上手にあらわすのが苦手でみんなで自分の意見を話し合おうなとかのことがあつたので正直いせです。



とても好き 好き あまり好きではない 好きではない

○なぜ、そう思いますか。

齋藤先生とやった道徳がめっちゃ楽しくて、人の気持ちを考えて発表したりするのは苦手だったけど好きになりました！

事前アンケートでは、自分の思っている事を表すことに苦手意識をもっているため、道徳の学習に対して「あまり好きではない」と回答していたが、事後では、発表することへの苦手意識は変わらないものの、ICTを介したことにより意見の交流を楽しいと感じられるようになり、道徳の学習に対する意識も「好き」に向上した。

D児

○道徳の学習は好きですか。

とても好き 好き あまり好きではない 好きではない

○なぜ、そう思いますか。

人の気持ちの勉強ができたときに、友達の良いところがわかったり、くみとれたりするから、道徳が好き。



○道徳の学習は好きですか。

とても好き 好き あまり好きではない 好きではない

○なぜ、そう思いますか。

今日の授業をやって、授業をやる前は「とめることなんて無理だよ」という考えを持っていました。でも今日の授業をやって「いじめをとめないといじめは無くならない！」と思うようになりました。
日常でも使えたり、日常にもつなげることができるから道徳が好きです。

事前アンケートで、他者の気持ちを考えたり、それがわかったりすることから、道徳の学習が「好き」だと答えていた児童である。いじめに対してもともと持っていた「いじめを止めることはできない」という認識から、他者との交流を経て、「いじめを止めないと、いじめはなくなる」と考えが変容している。道徳の学習に対する意識も「好き」から「とても好き」へと変容した。